

二十一世紀、中国は世界一の大国になる。十三億の人口は、アメリカの五倍。中国が豊かになれば、世界地図はめり変わる。

ハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル教授は、日本研究を始めると同時に、現代中国の研究にも手をめぐり、以来四十年間、この国の足跡を追いかけてきた。

当時中国は、鎖国も同然だった。研究するのにさぞ苦労したと思うが……。

「歴史や文化の勉強はまだよかったです。とにかく、いまの中国で何が起きているかがつかみにくい。そこで旅行者を取材したり、香港に行くと難民や大陸に帰省してきたお手伝いさんに話を聞いたり、何でもしました。中国通のソ連高官からも情報を教えてもらったなあ。あとは新聞。政府の宣伝記事でも丹念に読むと、実態がおぼろげにみえてくる。そうやって、五〇年代末の大躍進は失敗だったとわかりました」

この手法は、文化大革命でも役立った。中国各地の壁新聞の写しが香港に集まるのをフックスで送ってもらい、毛沢東対劉少奇、鄧小平の権力闘争だと突きとめる。

七二年の米中接近に関して「寝耳に水でした。キッシンジャーが一度、毛沢東や周恩来の人物評価を聞きたいと、ハーバード大にやって来たことがある。思えば彼が、パキスタン経由で密かに北京入りする少し前。國務省さえ知らなかったのだから、日本が頭出し外交だと怒る必要はない」

エズラ・ヴォーゲル

ハーバード大学教授に聞く

橋爪 大三郎



橋爪氏のインタビューに答えるエズラ・ヴォーゲル氏

21世紀の中国

実益重視の指導者たち ●当面は国内問題に手一杯

米との結びつき強まる

教授によれば、米中接近のきっかけは中国側、珍宝島事件だ。ソ連と戦争を覚悟した毛沢東は、ニクソンを呼ぶことにした。ソ連を孤立させれば、アメリカの利益にかなう。こうして、冷戦崩壊への決定的な一歩が踏み出された。

ヴォーゲル教授は、九三年に江沢民政権と太いパイプからワシントンで国家情報協会の東アジア担当情報官をめぐり、鄧小平のあとを継い

は、教授の目はどう映ったか。鄧小平ら革命世代と違い、いまの指導者は組織で育った人たちだ。文革前に大学に入った、工学部の出身者が多い。思想よりも実際に役立つこと、政治よりも政策を、彼らは重視する。頭がいし、国家のために献身的に働く」

「歴史や文化の勉強はまだよかったです。とにかく、いまの中国で何が起きているかがつかみにくい。そこで旅行者を取材したり、香港に行くと難民や大陸に帰省してきたお手伝いさんに話を聞いたり、何でもしました。中国通のソ連高官からも情報を教えてもらったなあ。あとは新聞。政府の宣伝記事でも丹念に読むと、実態がおぼろげにみえてくる。そうやって、五〇年代末の大躍進は失敗だったとわかりました」

「日本は、政治のリーダーシップが弱い。政治家は選挙区回りや派閥のかけひきに忙しくて、政策や外交をじっくり勉強する暇がない。義務教育の水準は素晴らしいが、大学は粗末。これらを改める努力が足りない」

「いや、安全保障もやはり大切だ。ジョセフ・ナイ國務次官補と私も話し合いに加わり、日米双方が努力した結果、同盟関係の維持・改定に成功した」



夕刊 新聞 第1頁

2000年(平成12年)3月27日(月曜日)

エズラ・ヴォーゲル

ハーバード大学教授に聞く

橋爪 大三郎

ヴォーゲル氏(左)にインタビューする橋爪氏



Ezra Felvel Vogel 1930年米オハイオ州生まれ。ハーバード大社会学部教授。同大東アジア研究センター長などを歴任。40年以上も日本・中国研究に携わり、二度にわたり調査研究のため長期来日した。日米関係については親日的発言で知られる。

「日本は、政治のリーダーシップが弱い。政治家は選挙区回りや派閥のかけひきに忙しくて、政策や外交をじっくり勉強する暇がない。義務教育の水準は素晴らしいが、大学は粗末。これらを改める努力が足りない」

「いや、安全保障もやはり大切だ。ジョセフ・ナイ國務次官補と私も話し合いに加わり、日米双方が努力した結果、同盟関係の維持・改定に成功した」

失速した90年代日本

マクロ政策失敗 ●経済国際化へ遅い対応

指導力弱い政治家たち

プラザ合意のあと円高不況を恐れて、銀行の貸し出しをゆるめすぎた。締めつけのタイミングが遅れたし、金詰まりになった金融機関の救済がまた遅れた。マネーゲームの尻ぬぐいに税金をつぎ込むなど、勤勉な国民の世論が抵抗し

「経済に関しては、金融危機以前は、商務省と特別通商代表が主導していたが、危機以降は財務省が発言力を増している」

団塊の世代が学生時代にかかわったのは、「大きな政治」です。また若くて、政治はこういう方向に行つて欲しいという切実なものは何もなかった。反安保にしても、ベトナム反戦にしても、自分たちの現実からは遠い課題でした。

私たちが突き動かしたのは、サラリーマンになりにくくないか、思いがたつたのではなかったのでしょうか。だから、自己否定



東工大教授 橋爪 大三郎さん(51)

生活感に基づく1票 今後の政治動かす

とか大学解体とか、自分の生活の基盤を取り崩してしまおうという動きになった。当然、そうした非現実的な行動は挫折し、多くはサラリーマンになりました。でも、現実的な問題に対処するため、「小さな政治」を動かすにはどうしたらいいかという訓練は、まったくできていなかった。

一方、これに対応する政治の側も、保守対革新という冷戦構造を反映したまったく相入れない二つの勢力の対立の構図でした。サラリーマンにすれば、自分たちの意思決定を代表して、

れる政党なんて、どこにもなかったのです。無党派になったり、その時々で反対票を投じたり。選挙では、傍観者の態度に終始せざるをえなかった。でも冷戦が終わり、革新勢力は変質し、自民党も割れました。選挙の結果次第で、違う政策が採択される可能性が出てきた。

団塊の世代も、もう五十年代。切実な問題をたくさん抱えた責任世代です。そうした生活実感に基づく1票が、今後の政治を動かしていく。政党も急速に、政策中心に変わっていくことになるはず。

おまけ

新聞

業界

日記

亭月

日曜日

2000年(平成12年)12月24日

天皇の戦争責任

加藤 典洋・橋爪大三郎・竹田 青嗣著

「たい人間的なものこそ天皇は、五十年前にあつたかたがたの石礫をもておぼろぎまでもなく、つい半世紀前のいさぎの終戦と後始末を考えれば明らかである。思えばまだ純朴であつた我が十代のころ、天皇が戦争の責任を取らないのは何故かと聞いて、下士官筋の教師を立てる往生させたことがあつた。人生の大事小事にかまけて当方はいつかそんなことは放棄したが、ここにまじめな人たちが論じ合ふこと前後、回、十数時間ついに及んだのである。

加藤典洋は「近隣諸国の住民に対する侵略の責任、戦争の死者に対する政治的、道義的責任」が昭和天皇にはあるのに「戦後、口をぬぐつている」と言い、橋爪大三郎は「天皇は立憲君主として、これ以上望めないほど適切に行動している」とあり、恭的にも政治的にも責任はなく、個人が「天皇の道義的責任」を問ふことは勝手だが「団体としての日本国民」があるのは反対だとの立場を執る。「ある／＼ない」ではは対立する二人の間を「天皇論議ならざる」の竹田青

「ある」「ない」巡つて 近現代史を総まくり

闘が取り持たせ、らまく「愚者実験」を繰り返せること出来たにせよ、たいくつ眺めたいがある。

生まれながらの「公人」として情實な人生を引き受けるを得なかつた天皇にこそまでも同情を察し得ない橋爪と、「戦争の死者たち」を代弁して「戦前・戦中に行つたことは戦後、天皇が之のよちな認識を示し、どう対応をこたか」を問題にせざるを得ない加藤と、ハイテクにも与えられる戦後の「沈黙」ならさかのほり、退位しなかつたこと、終戦の一重断、戦時の言動、開戦前に東条英機を選んだこと、日中戦争、二・二六事件、満州事変、さらに明治國家の成立まで、論者の見聞が健強ぶりが遺憾なく發揮され、日本近現代史を総まくりする観を呈する。詳細な注、参考文献、年表の手の込んだ作りも相まって、この本はわれわれが「考えるべきことを考えなければならぬ」(竹田) きつかけを作るのである。

橋爪の理屈はわかる。しかし私としてはやはり感情的に加藤の側にたたく。(本社編集委員)

天皇の戦争責任
加藤典洋・橋爪大三郎・竹田青嗣著
(径書房・558頁・2,900円)
かとうのりひろ 48年生、明治学院大教授
はしづめだいさぶ 48年生、東工大教授
たけだせいじ 47年生、明治学院大教授

な 朝鮮民主主義人民共和国の本を書かなければと思ったのか。直感、としか言いようがない。そして私は平壤に飛んだ。ジュラシック・パークのようなこの国に、二十万人以上の生身の人間が生きている！その驚くべき事実を、過不足なしに伝えたいと思った。

飢餓だ、核開発だ、テポドンだ。謎の指導者・金正日の秘密パティーだ。日本のジャーナリズムはセンセーショナルに、北朝鮮の「脅威」をさんざんあおり立てた。でも、だから何だというのか。北朝鮮は、やはり遠いよその国。ふつうの人びとは、どこか気になりながらも、自分には関係ないやと思ってしまう。

北朝鮮は、日本にとって、「ずっと連絡の取れなかった腹違いの兄弟」だと思っ。戦後の日本は、アジアに背を向け、ひたすら経済大国への道をひた走ってきた。でも日本とは、どこからどこまでをいうのか。日本国憲法には書かれていない。本州、九州、四国、北海道、ならびに周辺の島々。ポツダム宣言とカイロ宣言が、そう定めている。戦争に負けた日本は、この範囲を、疑ってはならない境界とみなすことになった。

新しい

敗戦を境に、台湾と朝鮮半島は、日本から独立した。独立後のあり方が不透明なままの見切り発車だった。人びとはそのため、独立と政治的自由をかけた、茨の道を歩むことになる。ここに北朝鮮は、今なお厳しい困難のまっただなかにある。

この地の人びとは一九四五年まで日本人、すなわち「同胞」だった。独立を果たした人びとを、日本が勝手に「同胞」よばわりするのは、失礼かもしれない。けれどもそれは、歴史的な事実である。戦後の日本人は、それを集団的に忘却し、切り捨ててきた。それもまた、失礼であろう。

核開発を進め、ノドン・テポドンを打ち上げ、ハリネズミのような臨戦態勢をとっている北朝鮮。ミサイルの一、二発も飛んでくるかもしれない。とんだ迷惑だが、もとはと言えば、かつての「同胞」が、半世紀あまり、独自の道を歩んだ結果だ。もうひとつの「戦後日本」が、そこにある。

北朝鮮で私は、不思議な「既視感」にたびたび襲われた。それは、戦前の天皇制が生き残っているからでは、と思いがたつた。金日成は天皇なので、金正日はその地位を継承した。「主体」は「国体」の焼き直しである。

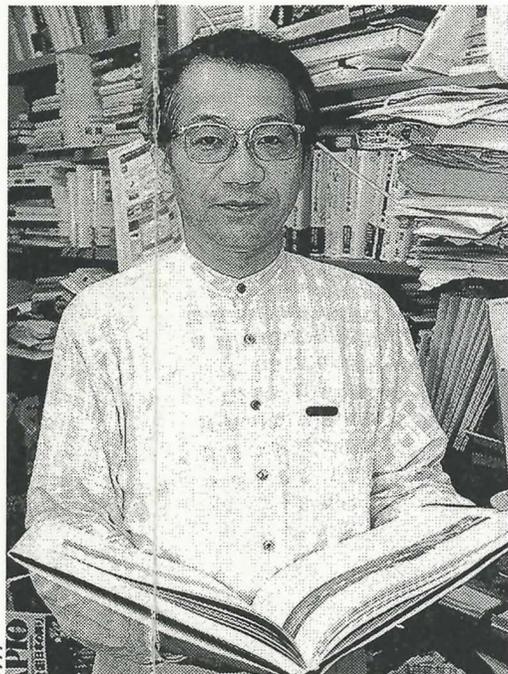
それから私は、北朝鮮に関係がある本や論文を読みあさった。センセーショナルな記述をかきわけ、きれぎれの情報をつなぎあわせると、北朝鮮社会のありのまま

●アジアの視点で見つめよう

橋爪大三郎さん (東京工業大学教授)

『こんなに困った北朝鮮』

はしづめ・だいさぶろう
1948年生まれ。社会学専攻。著書に『はじめての構造主義』『言語ゲームと社会理論』など。99年秋から10カ月、ハーバード大学に客員研究員として滞在、エズラ・ヴォーゲル教授と北朝鮮問題で意見交換。



書物の森を散歩する

の姿が浮かび上がってくるように思った。そのいっぽう日本では、北朝鮮のことをだれも真剣に、科学的に、責任をもって考えていないということも痛感した。戦後日本の底の浅さだ。アジアの視点から、自分をみつめてこなかったのだ。

中国や韓国などアジアの人びとが、なぜ歴史を蒸し返し、いつまでも日本を許さないのか。それは、日本がかつて働いたかかずの悪業のせいだが、それ以上に、日本人がいまなお傲慢さにとっぷり漬かっているからだ。福沢諭吉は「脱亜入欧」遅れたアジアと一緒にされては迷惑だ、と述べた。戦後日本はアジアの存在を切り捨てた。もともとアジアの中心は中国で、韓国、そして日本の順番だった。日本は忘恩の国なのだ。成長を乞ったアジアの国々と日本は、対等なパートナーの関係を築くべきだが、簡単ではない。

日本にとってその第一歩が「こんなに困った北朝鮮」の実態を理解することではないのか。「かわいそつな隣国」の話ではない。戦後日本が、つぎの時代に脱皮するための、発想の転換ができるかどうかの正念場なのである。

(メタローグ・一五〇〇円)

教授は何度も北朝鮮を訪れ、政府と太いパイプを持っていきます。北朝鮮をどうみますか。

「私の経験では北朝鮮は信頼できる国だ。旧ソ連が崩壊し、経済力にまざり米国の軍事力に支えられた韓国に、恐怖感を抱いている。政府も人民も生き残りに必死だ。そうした立場から理解する必要がある」

——日朝間には大きな溝があります。打開策は？

「非常に難しい。ただ、いま米朝間に起きていることが、北朝鮮の対日政策に重要な変化をもたらすと思



米ジョージア大学教授 ハンシク・パク氏
Han Shik Park 韓国系米国人。中国生まれで、日本の敗戦で韓国に帰国。ソウル大卒、米ミネソタ大で政治学博士号。72年に米国籍を取得した。米朝間の民間チャンネルのひとり。61歳。

米朝交渉を静観するな

「歴史の清算」というのは実に難しいと思います。「歴史が清算されたことなどあるだろうか。米国は

——歴史の清算といものは実に難しいと思います。「歴史が清算されたことなどあるだろうか。米国は

「歴史の清算」というのは実に難しいと思います。「歴史が清算されたことなどあるだろうか。米国は

「歴史の清算」というのは実に難しいと思います。「歴史が清算されたことなどあるだろうか。米国は

「歴史の清算」というのは実に難しいと思います。「歴史が清算されたことなどあるだろうか。米国は



① 日本と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)は、今月中にも再開3回目の国交正常化交渉(通算第11回)を開く。6月の南北首脳会談で韓国と北朝鮮は和解へと動きだした。米国と北朝鮮も「反テロ共同宣言」を出し、北朝鮮高官が訪米中と関係改善の兆しが見える。日本の動きは、まだ鈍い。どうかじ取りをすればよいのか。日本と、関係する国々の識者に、5回にわたって聞く。

近著「こんなに困った北朝鮮」で、「最悪の事態」に備える必要性を強調しています。

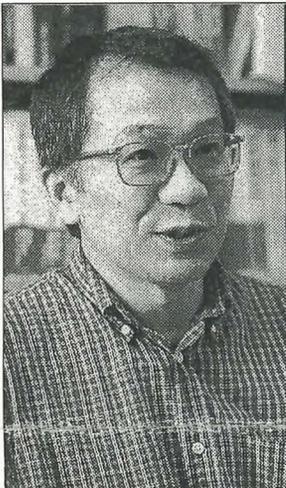
「日本には膨大な資産があり、相手には都市機能を破壊できる兵器があるからです。その点で昨年の新方イデオロギイ関連法は効果があ

「北朝鮮は今、国民総生産(GNP)のかかりの割合

「北朝鮮は今、国民総生産(GNP)のかかりの割合

東工大教授

橋爪大三郎氏



はしづめ・だいさぶろう 神奈川県出身。東大大学院修了(社会学)。著書に「はじめての構造主義」、小林よしのり、竹田青嗣両氏との共著「正義・戦争・国家論」など。96年に北朝鮮を訪問。51歳。

出方見ながらじじじ

なるか。

「南北会談は象徴的だった。分断国家の首脳同士が統一を約束するなんて、ベトナムでもドイツでもなかった。だから、遅かれ早かれ半島は統一される。日本は北朝鮮ではなく、統一コリアとどうつきあうかを考えた方がいい」

「南北会談は象徴的だった。分断国家の首脳同士が統一を約束するなんて、ベトナムでもドイツでもなかった。だから、遅かれ早かれ半島は統一される。日本は北朝鮮ではなく、統一コリアとどうつきあうかを考えた方がいい」

(外報部・国末憲人)

殉教の聖人 ジョン・レノン

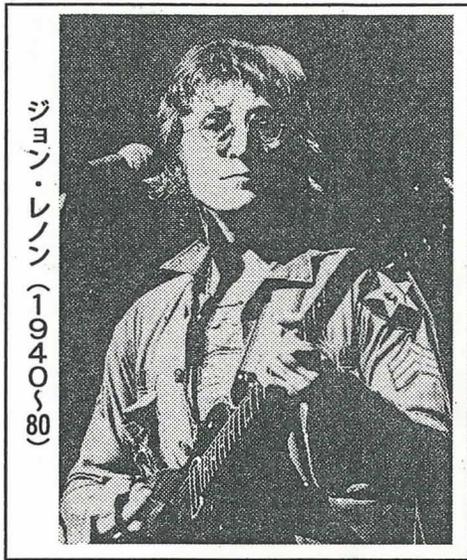


橋爪大三郎

ビートルズを、宗教(特にキリスト教)に結びつけるのは唐突だろうか。
奇抜な髪形(マッシュルームカット)で、彼らは注目を集めた。これが、中世の修道士にそっくり。ロックンロールに似合わないきれいなメロディラインや、誰がリードをとっているのかわからないコーラスは、少年聖歌隊を思わせる。四人組なのも、マタイ・ヨハネの四冊の福音書みだ。最高の作詞作曲コンビと言われた Lennon + McCartney...

ドラッグに束の間の夢を追い、マハリシ師に憧れてインドで瞑想の日々を送り、やがて解散(一九七〇年)。その解散にしても、四人の個性がそれぞれ道(ミッション)を進む、新しい旅立ちにみえてしまう。イエス・キリストは、ある日二人(四の倍数!)の弟子たちを集め、各地に伝道におもむくよう促した(ルカ・九章)。
ビートルズのメッセージは、つまるところラブ(愛)、そしてピース(平和)。衛星で世界に実況中継された「オール・ユア・ニード・イズ・ラブ(愛こそはすべて)」にせよ、レノンとオノ・ヨーコのベッド・インにせよ、『聖書』のメッセージをなぞっているようにみえる。
一九六〇年代、イデオロギー対立と核戦争の恐怖の谷間で、物質文明に囲まれ、世俗的であるしかなかった若者たちを導くという、ミッシェンの旅路ではなかったのか。
そしていま、ジョン・レノンは、殉教の聖人になった。ダイアナ妃やケネディ一家やマリリン・モンローやキング牧師と並んで、二〇世紀を生きた人びとの心の風景にしっかりと焼きつけている。
頼とあてがれである。そこで逆に、ここまで宗教にこだわり、宗教を否定できるのは、ジョン・レノンその人が救世主だからではないのか、という幻想を人びとのあいだにふりまくことになる。風貌といい、欧米世界の人びとにとって、ジョン・レノンはどこか、イエス・キリストのイメージとだぶってみえるところがある。
レノンに救済を求めるファンは、自分が勝手に思いえがいた救いをえられず、レノンに受け入れられないとわかつたときに、憎しみと殺意に反転する。レノンは、そうしたストーリー的なファンの犠牲となった。イエスを裏切ったユダと同じ心理が、ここでも働いたのかもしれない。
レノンを失って、ビートルズの軌跡にピリオドが打たれた。ビートルズが、そしてジョン・レノンが追求めたのは、冷戦下の世界ではほとんど不可能な、理想世界(のイメージ)だったのかもしれない。人びとが現実世界の制約を離れて、思うままに生きられる場所は、歌のなかにはなかった。だが時代はめぐり、冷戦の重苦しい構造は、ペレストロイカ、そしてポスト

没後20年 ビートルズ解散30年に寄せて



ジョン・レノン(一九四〇〜八〇)

一九八〇年、ニューヨークの路上でファンに射殺されたレノン。彼のなにか、犯人を招きよせたのだろうか。
「イメージ」で、彼はこう歌う。「神の国なんかなくて、頭の上に、からっぽの空しかないとしたらどうだろう。…誰もが神の国のためではなく、今日のために生きているとしたら。」
「ゴッド」では、「愛情(Feeling)なんか信じない……バイブルなんか信じない」と歌う。また「アイ・ファウンド・アウト」では、「天からイエスが再臨するなんて、ありっこない」と歌う。

レノンの音楽にふれて気づくのは、既成の宗教に対するいらだちと反感、そして、人びとの素朴で純粋な愛情についての信

冷戦を経て解体していく。ビートルズは、過去の音楽となっていく。
にもかかわらず、人びとはビートルズを忘れなかった。レノンの歌声は、はっきりとしたメッセージをいまも伝えている。

一人ひとりが自分のライフスタイルや個性を紡ぎ出してもよいのだ。物質文明と無関係に、人間らしくあることの勇気を持つ。集団であること、そして一人であることを恐れる理由はない。……。いままた、イギリスで『ビートルズ』が爆発的に売れているという。アマチュアから出発したロックバンドが、これだけ時代と併走し、人びとの心に食い込むというものは希有ではないだろうか。
(はじごめ たいさぶろう・東京工業大学教授・社会学)